

Title	<文献紹介> オハド・ナハトミ著『ライブニッツ形而上学における可能性・活動・個性』 Ohad Nachtomy, Possibility, Agency, and Individuality in Leibniz' s Metaphysics, Springer, 2012.
Author(s)	阿部, 倫子
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 113-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26548
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

《文献紹介》

オハド・ナハトミ著

『ライプニッツ形而上学における可能性・活動・個性』

Ohad Nachtomy¹, *Possibility, Agency, and Individuality in Leibniz's Metaphysics*, Springer, 2012.

阿部倫子

本書の目的は、ライプニッツの可能性に対するアプローチを明らかにし、彼の形而上学に対するこのアプローチの影響を探ることである。この目的のために注目するのは、個体とその条件である。このため、個体あるいは完足個体概念についての記述が多い。完足個体概念は主に『形而上学叙説』（1686年）やアルノー宛書簡（1686-1690年）で扱われる考え方で、各個体を主語とし、各個体それぞれに起こるすべての出来事を述語とする。ライプニッツ自身は次のように述べる。

個体的実体の概念は、以後その実体に起こる事柄をすべて事前に含んでいて、この概念を考察すれば、円の本性のうちにその本性から演繹しうるすべての性質をみることができるように、その実体について真に述べうるすべてのことを見ることができる²。

神の世界創造によって可能的な個体が現実の個体になっても、その完足個体概念の内容に変更はない³。

本書は以下の構成から成る。基本的には章を追うごとに時期がより後のテキストを扱っている。

第1部 可能性 第1章 可能性に対するライプニッツの組み合わせ的なアプローチ

¹ Ohad Nachtomy はイスラエルのバル＝イラン大学 Senior Lecturer。専門はライプニッツとスピノザを主とした17世紀哲学。

² 『形而上学叙説』第13節。Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz, ed. by C. I. Gerhardt IV, Berlin, 1880, p.436. 日本語訳は工作舎『ライプニッツ著作集』から引用。以降もテキストの日本語訳にかんして同じ。

³ ただし Mates はこの解釈をとりつつ、現実存在は述語だとするテキストもあると指摘している。Benson Mates, *The Philosophy of Leibniz: Metaphysics and Language*, Oxford University Press, 1986, p.101. 指摘されるテキストは G. W. Leibniz: *Sämtliche Schriften und Briefe*, ed. by Deutsche Akademie, 6. 6. p.358 および 6. 6. p.437.

	第2章	可能的な個体	
	第3章	論理的空間における個体の位置づけ	
	第4章	諸個体・諸世界・諸関係	
第2部	活動	第5章	可能性と現実性
		第6章	活動と自由
		第7章	活動と必然性
第3部	個性	第8章	集積
		第9章	入れ子状の個体
		第10章	可能性と個性

以下、章に沿って本書の内容を概説する。

第1章では、ライプニッツの可能性に対するアプローチの背景が示される。

ライプニッツにとって可能性がなくてはならないものであるのは、自由意志を保障するためだけではない。道徳的な判断が意味をもつためということもその理由である。現実とは別の可能性がなければ人間の行動は複数の選択肢からの行動ではなくなるため、道徳性を問うことができなくなる。なぜなら、他の選択肢がない判断は道徳的に正しいとも間違っているとも言えないからである。よって可能性に対するアプローチには、形而上学的なコンテキストだけではなく神学的なコンテキストもある。

可能的なものは神の精神において存在するという想定は、先行する哲学の影響下にある。アウグスティヌスによるプラトンのキリスト教的解釈以来、可能的なものは神の思考における永遠で不変の形相だと考えられてきた。このような形相はもともと空間-時間的で因果的な変化を伴う活動性 (activity) および存在 (being) と関連付けられていたのだが、しかし近世に入ると形相はそのような活動性からは切り離された。よって可能的なものは非時間的で非物質的な種類の活動性とみなされるようになった。つまり神の知性的思考によって考えられたものであって、それ自体は空間-時間的の性質や因果的の性質をもった存在ではない。ライプニッツにとっての可能的なものも、これと同じである。さらにライプニッツは、可能性の領野はすべての存在と思考の絶対的な前提条件であるとするストアスに従って、神の精神における存在と純粋な論理的な可能性とを区別した。可能的なものが存在と思考の前提条件であるならば、論理的に可能なことがら存在するものよりも以前になければならない。ゆえに可能的なものとは、存在 (entity) ではなくたんなる論理的に矛盾のない思考である。

ただしこのような思考をもつ神自体は現実に存在するため、この点でライプニッツはアクチュアリスト⁴である。ライプニッツにとって不可能な観念、すなわち矛盾した観念というものはいない。よって思考の対象である観念はすべて無矛盾で可能的であるから、思考可能なものは存在が可能なものである。言い換えれば可能的であるということは、神によって思考されうると

⁴ ここで著者の言う「アクチュアリスト (actualist)」とは、可能的なものには現実に存在している何らかの根拠があるとする立場を指し、次の語用に従ったものである。Robert Merrihew Adams, "Theories of Actuality," *The Possible and the Actual*, ed. by Michael J. Loux, Cornell University Press, 1979, pp.190-209.

いうことである。複雑な観念は単純な観念の組み合わせであるので、このことはすべての可能的なものにあてはまる。ゆえにあらゆる可能的なものには現実存在する神によって思考されているという基礎があるので、ライプニッツの立場はアクチュアリストである。

第2章では、どのようにして個体の概念あるいは可能的な個体が神の組み合わせ的な思考の活動によって作りあげられるのかが整理される。個体概念は可能的なものについてもあるのだから、可能的な個体 (possible individual) というものもある。著者は個体の完足概念は可能的な個体に対応するという Mates の主張⁵ を参照し、可能的なものはいかなる意味でも存在 (entity) をもたないと述べる。なぜなら可能的な個体に対応する完足個体概念はそれだけでは現実の個体の存在を含意しないからである。したがって完足個体概念すなわち可能的個体は第1章でも触れられたように神の知性によって思考されるだけであって、それ自体に存在はない。

神の思考における可能的な個体のあり方にかんして特に重要であるのは、神の思考が再帰的だということである⁶。神の思考が再帰的だからこそ、単純な思考から複雑な思考が組み合わせられ、複雑な内容をもつ可能的な個体が思考される。ただし、単純な観念の組み合わせによる複雑な観念の個体化は、複雑な内容を構成する述語のみによって達成されるのではない。個体化にはそれらの述語が内的に組成されることも必要である。つまり、完足個体概念にはたんなる属性の組み合わせ以上の内的な秩序がある。著者自身はこの解釈を、Mates、Fichant、Adams など個体概念を属性の集合とする解釈の不十分さを埋めるものだと評価している。

第3章では、どのようにして可能世界が個体の概念の共可能的な集合として作られるのかが整理される。ラッセルが問題にして以来、現実の個体間の関係は多くの研究者の興味を引いてきたが、しかし可能的な個体間の関係についてはほとんど扱われてこなかったと著者は述べる。著者は後者の関係を次のように整理する。

- (1) ライプニッツは可能的な個体間の関係というものを前提としている。
- (2) この関係は可能世界という概念が成り立つために必要である。なぜなら、もし可能的な個体間の一致・不一致という関係がなければ、各々の可能世界を区別する基準がなくなって、無数の可能世界がただ1つの可能世界にまとめられてしまうからである。
- (3) この関係は個体についての概念が個体化されるためにも必要である。

最後の(3)からは、一見すると循環が生じるように見える。(3)にあるように個体が個体間の関係を前提とするだけでなく、同時に個体間の関係も個体を前提とするはずだからである。著者はこの循環を避けるため、各個体を個別的にそれ自体で論理的に可能なものとしてみる場合と、論理的空間全体を考慮して各個体を論理的空間上のそれぞれの位置に割り当て他の諸個体と関係をもつ集合としてみる場合を区別する。前者の場合には他の個体との関係は考慮されないの、個体は個体間の関係を前提しない。そのため互いが互いを前提とするという循環を避けることができる。

⁵ Benson Mates, "Leibniz in Possible Worlds," *G. W. Leibniz Critical Assessments I*, ed. by Roger Woolhouse, Routledge, 1994, pp.210-211.

⁶ 著者が参照するテキストは ed. by Deutsche Akademie, *ibid.*, 6. 3. p.517.

また個体間の関係というものは、自己の権利による存在 (entity) ではないし、思考する精神における性質でもない。著者は Mugnai の主張⁷に従い、ライプニッツにとって関係とは2つの事物を同時に思考した結果だと考える。つまり個体間の関係とは精神による論理的な操作の結果であり、そのため現実世界の個体間についての関係であってもそれ自身が存在するわけではない。現実存在しうるのは個体だけである。

第4章では、可能的個体と可能世界は相互に相手を構成するという著者の解釈が検討される。第3章の内容の通り、循環を避けなければ個体と個体間の関係はどちらも互いを前提とする。よって、可能的な個体と可能世界についても同じことがいえる。可能的な個体とそれらの間の関係によって可能世界が構成されるのだから、世界についての概念が個体についての概念に先行することはない。

このような解釈の検討のためには、不完全な個体 (incomplete individual) と完全な個体 (complete individual) を区別することが重要である。不完全な個体とは非関係的な述語だけでできた個体で、完全な個体とは関係的な述語も含んだ個体である⁸。可能世界が可能的な個体に先行することなく両者は相互に相手を構成すると言う場合の個体は、個体の完全な概念 (complete concept of individual)、つまり通常の意味での個体概念である。これに対して個体の不完全な概念 (incomplete concept of individual) の場合は、可能的な個体が可能世界に先行する。つまりこの場合個体の概念は完足していない。不完全な個体は関係的な述語を含まないため、この場合の個体の概念は個体間の関係によって構成される世界よりも先にあることができる。したがって、完全な概念をもつ可能な個体と可能世界の両者は不完全な個体をその基礎として成り立つことが分かる。

よって神の世界創造のプロセスは次のようになる。

- (1) 神の精神における個体の不完全な概念の形成。
- (2) 個体の不完全な概念すべてが相互に考慮され、個体間の関係が形成され、個体についての概念の完全化と可能世界の構築が行われる。
- (3) すべての可能世界についてそれが現実化されるかどうか考慮される。
- (4) 選ばれた世界が創造される。
- (5) 創造された個体的実体が、その可能性や本質を空間-時間的に実現 (realize) する。

なお、この順序は時間的な順序ではなく論理的な意味での順序である。

第5章では、個体の完全な概念と現実の実体の本質的な相違は何にあるのかが論じられる。非活動的な概念がどのようにして活動的な実体になるのか、ということである。

現実の実体には、実体が活動的であるための源 (source) がある。活動性の内的な源をもつことには次の2つの面がある。活動 (action) の内的な法則をもつことと、活動の原初力あるいは原初力能をもつことである。著者は例えばライプニッツの次のテキストを参照する。「活動的な力においては、原始的エンテレケイア、換言するなら、魂に類比的なものがあるとわかりま

⁷ Massimo Mugnai, "Leibniz's Theory of Relations," *Studia Leibnitiana Supplementa* 28, 1992.

⁸ この区別は Gregory Brown、また Cover と O'Leary-Hawthorne の共著によって既にその実用性が指摘されていると著者は併記している。

す。その本性は、……永遠の法則のうちにあります」⁹。内的な法則が活動のプログラムを定めるのに対して、原初的力はそのプログラムを実行させる。よって、ある個体に何が起こるのかが規定されているだけでは、その個体が活動的であるとは言えない。規定された内容を実行して初めてその個体は活動的となるからである。したがって非活動的な概念すなわち可能的な個体が現実の実体になるために必要なものは、内的な法則を活動化 (activate) させるための力である。現実化とは、個体の内的な法則に神が能動性を結びつけて自発的な行為者 (agent) を創造することにある。

第6章では、人間は自由に行為するという主張と完足的な概念という個体の定義との間の一見すると矛盾にみえる関係について論じられる。その人に起こることが完足的に規定された概念が各人にあるのだから、人間の判断には自由意志の余地がないように一見思われる。しかし第1章で触れられたように、判断が道徳的な意味をもつためにも、人間の行為は自由なものでなければならない。

自由に道徳的判断を行う人間は、論理的必然性ではなく道徳的必然性に従う。論理的必然性は矛盾律によって何が可能的なものなのかを整理するだけで、それら可能的なものの中でどれを選ぶべきなのかを決定することはできないからである。論理的にはどれも可能なものの中で決断するには道徳的な考慮が必要である。道徳的必然性の必然性は自由意志と相反するような必然性ではない。判断が理由に基づいた合理的なものであることを示すという意味での必然性である。判断が道徳的必然性に従っていても、選ぶ選択肢が論理的必然性によって1通りだけに決定されていなければ、その判断は自由な判断である。

個体の完全な概念と自由意志の矛盾を避けるために、著者は次のような解釈も提示する。個体の概念の主語と述語とのつながりは概念どうしの関係である。これに対して、個体の概念の述語と個体の実際の行為との関係は概念どうしの関係ではなく、概念と行為者の活動との関係である。概念と活動はそれぞれ別のカテゴリーに属するものであるから、個体の概念の述語はその述語の必然的な活動化を意味しない。活動をおこなうのは行為者であって、概念ではないからである。つまりどれだけ詳細な活動の記述であっても、行為者にその活動を行わせることは記述にはできない。よって個体の完全な概念は意志を必然化せず、自由意志と矛盾しない。

第7章では、偶然性にかんしてライブニッツとスピノザが比較される。スピノザでは、自然の本質と自然の現実存在のあいだには内的なつながりがある。このため自然における行為者の活動は偶然性のない必然的な活動である。これに対してライブニッツでは、本質と現実存在は区別される。このため行為者の活動は偶然的な活動である。この比較が示すのは、スピノザと違い本質が活動性を含意しないというライブニッツの特徴である。だからこそライブニッツでは、世界が現実化されるためには世界が可能的であるだけでは不十分で、それとは別に実体の活動性が必要である。

第8章では集積 (aggregate) について論じられる。集積とは、諸実体の集まりで、実体と違っ

⁹ ed. by C. I. Gerhardt, *ibid.*, II, p.171. 日本語訳で「を認知します」と訳されている *agnosco* を「があるとかかります」と変えた。また、「能動的」と訳されている *activus* を本文献紹介全体の整合上「活動的」と変えた。

て非有機的であり統一性をもたない。集積である延長物体・物質的物体の位置づけはあいまいなものである。物質はよく基礎づけられた現象（*phenomena bene fundata*）と呼ばれ、真の存在とたんなる現象の間にある。しかし、集積は複数の実体が直接組み合わさったものではない。ライプニッツは基礎的なレベルである活動的な実体とそこから派生する集積すなわち延長物体の関係を、点と線の関係にたとえる。点は線を作り上げるための部分ではなく、線が存在するために必然的に要求される何かである¹⁰。つまり、点を集めると線が産出されるわけではない。これと同じことが諸実体と延長物体の関係にもいえる。実体は延長物体の構成要素ではなく、延長物体は実体の集まりから産出されるのではない。そうではなく、諸実体は延長物体に含まれる必要条件である。したがって、非有機的で統一性のない集積は有機的で統一性のある実体とは区別されるが、しかし同時に個体的実体から派生するという点でたんなる現象とも異なる。絶対的な実在性（*reality*）を備える実体に由来する延長物体すなわちよく基礎づけられた現象は、フィクションでも幻想でもない。

第9章では、入れ子状になった個体と、それに特有の有機的な統一性について論じられる。入れ子状の個体（*nested individual*）とは、ライプニッツにおいて個体のなかにはさらなる下位の個体が含まれていることを指す著者の用語である。たとえば『モナドロジー』第70節でライプニッツは次のように述べている。

そこで、どの生命の身体もそれを支配するエンテレケイアをもち、動物ではそれが魂であることがわかる。ただこの生物のどの肢体にも他の生物、植物、動物が充ちていて、そのそれぞれがまた、それを支配するエンテレケイアとか魂をもっている¹¹。

一般的な解釈では、ライプニッツのこのような考え方は物理学的な水準にある延長した身体のみにも適用され、形而上学的な水準にある個体的実体には適用されない。これに対し著者は、入れ子状という考え方は形而上学的な水準でも適用できると主張する。個体が入れ子状になっていることで果たす意義は、個体の機能的組織（*functional organization*）である。個体の機能的組織の構成要素には、個体の目的因を実現するという活動的で構成的な役割がある。つまり個体の入れ子状の構造は、物理学的な水準では説明されない目的因に関わっているため、形而上学的な水準にも適用される。ただし、入れ子状の問題にかんしてライプニッツのテキストは決定的でないため、著者の論が実際にライプニッツの見方であったと示す確証を出すことはできないとも述べられている。

著者の解釈は次の通りである。

- (1) 個体的実体には入れ子状になった構造がある。
- (2) 入れ子状の構造がもつ統一性は、活動性の源を通して理解される。
- (3) 入れ子状と統一性は、物理学的なモデルだけではなく、活動的で機能的な組織の形而上学的

¹⁰ G. W. Leibniz: *Philosophical Essays*, ed. and trans. by Daniel Garber and Roger Ariew, Hackett, 1989, p.103.

¹¹ ed. and trans. by Garber and Ariew, *ibid.*

なモデルに従って解釈される。

- (4) 個体的実体における活性化と支配は、目的因に関係した機能的組織によって説明される。
- (5) 活動性を組織化し統一化することは存在し生命があることと強く関連しており、これに対し集積やたんなる可能的なものは生きていないし完全な意味では存在していない。

第 10 章では、入れ子状の構造をもった個体がどのようにして 1 つの単純な実体でありえるのが検討される。1 つの個体のなかにさらに別の諸個体があるのならば、どうして最初の個体は統一性をもった単純な個体だと言えるのかという問題である。

たしかに 1 つの個体には他の個体が無数に含まれる。しかし問題となっている単純性や統一性は最初の個体の物質的な部分ではなく、内的な活動の法則に由来する性質である。つまり単純性や統一性は、個体の物質的な部分が集まることで生じるのではない。したがって、個体の単純性と統一性は下位の諸個体に還元されない。またライプニッツにとって単純であるものとはどのようなものなのかという問いに対し、「それによって完全へと向かう実体の内的な法則である」という Becco の言葉¹² を著者は引用する。よって実体は、何よりもその形相やその活動的な力によって認められる。そして形相や活動的な力は、何よりも実体の活動のプログラムによって認められる。したがって実体の自己同一性はその活動のプログラムの自己同一性であるから、もし活動のプログラムが分解することがあれば、そのときその実体は別の仕方では別個体化された別の個体となる。よって内的な法則である活動のプログラムが変化しない限り、その内に他の無数の個体を含んでいても個体の自己同一性は変わらず、したがって単純性も統一性も失われない。ゆえに、個体の構造が入れ子状であっても個体は単純性や統一性を備えていると言うことができる。

以上全 10 章の概要の通り、本書は個性性の条件に関連した視点からライプニッツの可能性へのアプローチを明らかにする。第 1 部は完足個体概念をもつという、何かが可能的な意味で個体であるための条件を論じる。これに対して第 2 部と第 3 部は活動性をもつという、何かが現実的な意味で個体であるための条件について論じる。つまり本書は可能的なものにかんする面だけではなく、現実の個体には活動性や入れ子状の構造があるという現実存在にかんする面でのライプニッツ形而上学の特徴についても明らかにする。よって本書はライプニッツ形而上学における個体のあり方についての包括的な解釈の提示に成功している。

(あべともこ 哲学哲学史・博士後期課程)

¹² Anne Becco, *Du simple selon Leibniz*, Vrin, 1975, p.116.